ヴァーラーナシー(ウッタル・プラデーシュ州, インド)の都市空間形成と 巡礼路および寺院・祠との関係

RELATIONSHIP BETWEEN SPATIAL FORMATION OF VARANASI CITY (UTTAR PRADESH, INDIA) AND PILGRIMAGE ROUTES, TEMPLES AND SHRINES

柳 沢 究*, 布 野 修 司**

Kiwamu YANAGISAWA and Shuji FUNO

The purpose of this study is to consider the principles of space formation of the city of Varanasi, which is well known as "the holiest city" in India. In the city, there are thousands of temples and shrines, and several pilgrimage routes, which are said to be organized complicatedly based on the Hindu cosmology. This paper discusses such religious elements in terms of how they have influenced the formation of the urban space, based on the field survey of Antargriha. First, it is considered, the basic urban structure of Varanasi focusing on the geography, streets systems and the conceptual system of the pilgrimage routes, and secondly, the circumstances of the physical urban space, analyzing the distinct feature of pilgrimage points, the distribution of temples and shrines and the transformation of a block.

Keywords : *Varanasi, Hinduism, Pilgrimage, Sacred Precinct, Cosmology, Block formation*

ヴァーラーナシー、ヒンドゥー教、巡礼、聖域、コスモロジー、街区形態

1. はじめに

1-1. 研究の目的と視点

本研究は北インドにあるヴァーラーナシー Varanasi^{*1}の旧市街域を対象として、都市空間の構成原理について考察することを目的としている(図1)。本稿における主要な論点は、都市に存在する巡礼路および寺院・祠^{*2}を、都市空間の物理的形成・変容過程における要因の一つとして評価することである。

ヴァーラーナシーはヒンドゥー教の最大の聖地としてメッカやエルサレムに例えられ、インド国内外より数多くの巡礼者を集める宗教都市であり、都市内には多数の宗教施設と体系だてられた巡礼路が存在している。このような宗教都市においては、その宗教固有の宇宙観やそれに基づく理念的モデル、巡礼や祭礼などの都市儀礼、寺院・祠といった宗教的施設が存在が、都市の形成に何らかの影響を及ぼしていることが当然考えられる。特にヒンドゥー世界では、コスモロジーや宗教的理念の具現として都市が計画、建設される事例が多い^{*3}。しかし一方で、ヴァーラーナシーは三千年の歴史をもつインド最古の都市の一つであり、今なお活発に「生きられ」ている都市である。したがって都市の形態・構成を、単純に宗教的理念の反映とみなすことはできず、同時に住民の生活に根ざした機能的な論理や他民族の移入や政治的支配状況の変化が、その空間構成には大きく作用していると考えられる。

本稿ではこうした観点から、まず諸文献をもとにヴァーラーナシーの歴史的形成過程、都市とコスモロジーとの理念的対応関係をまとめた上で、現地調査に基づき巡礼路および寺院・祠と都市空間構成との関係について考察する。

ヴァーラーナシーはインド各地にあるヒンドゥー教の聖地・巡礼地の祖型の一つとみなされており^{*4}、ヴァーラーナシーにおける宗教的要素と都市形成の関係性を明らかにすることは、インド世界における宗教都市の空間特質を探る大きな手がかりとなると考える。

1-2. 既往の研究と本稿の課題

ヴァーラーナシーに関する研究は少なくない。本稿に関連する主要なものは末尾に示す通りである。都市史、特に宗教的側面を中心にヴァーラーナシーを概括したものに、シェリング M.A. Sherring (1868) やハヴェル E.B. Havell (1905)、近年ではエック D.L. Eck (1983) による著作があり、いわゆる「聖地・ヴァーラーナシー」に関する今日の一般的認識はこれらをもとに成立しているといつてよい。地理学の立場から都市の発生や初期の街路形態について論じたものには、R.L. シン Singh (1955, 73, 76) の研究がある。考古学的発掘をもとにこれを跡づけているのがナレイン A.K. Narain (1976)、B.P. シン Singh (1985) 等である。

ヒンドゥー教における巡礼の概念に関しては、バルドワージ S.M. Bhardwaj (1973) によるサンスクリット文献とヒアリング調査

* 神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科 助手・工修

** 京都大学大学院工学研究科 助教授・工博

Research Assoc., Graduate School of Design Research, Kobe Design University, M. Eng.
Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

にもとづく論考がある。巡礼地の重要度の歴史的変遷や巡礼路の循環構造が指摘されている。ヴァーラーナシーにおける巡礼路のコスモロジーとの関係については多くの文献がふれているが、それらを包括的に論じているのが、R.P.B. シン Singh (1993) である。マーハートミヤ mahatmya^{*5} に記載された巡礼地を現在の寺院・祠と照合・同定し、多くの巡礼路のルートを描定している。彼はヴァーラーナシーがヴィシュヴァナート Vishvanath 寺院^{*6} を中心とした同心円構造を有し、ヒンドゥー教理念に厳密に基づいて作られた都市であるとする。しかしその考察は巡礼路の理念的構造化にとどまり、物理的な都市空間との関連や巡礼路の成立過程については及んでいない。個々の寺院に関してはヴィディヤルティ L.P.Vidyarthi (1979) がヒアリング調査をもとに所有や運営の状況を論じている。

以上のようにヴァーラーナシーの都市研究は個別の分野については検討がなされているが、それらを相互に関連づけるような論考は少ない。巡礼路および寺院・祠を都市形成の要因と位置づけて考察する視点は、本稿が初めて提示するものである。

1-3. 調査概要

本研究の論考は1999年8～10月および2000年10～11月に行った二度の現地調査に基づく。この調査において重要な下敷きとなったのは、1928～29年にかけてインド調査局 Survey of India により作製された精密な都市地図（縮尺 1/1000、全17葉中16葉）である^{*7}。この地図はヴァーラーナシー旧市街全域を網羅しており、モハッラ mohalla^{*8} の名称、建築物の外形が記載され、寺院・祠、井戸などの諸施設がプロットされている。この地図と既往の研究をもとに、調査対象地域を設定し現況との照合・訂正により現代版を作成した上で、各種の調査を実施した^{*9}。

図1 ヴァーラーナシー概要

インド調査局による1929年都市地図（16葉）にもとづき作成。

2. 都市構造の形成

ヴァーラーナシーはガンジス Ganges 川中流域に位置し、古代より同地域の政治・経済・文化・宗教の中心都市として栄えてきた。一般にヴァーラーナシーの歴史は以下の三段階に分けられる^{*10}。

(1) 古代～ヒンドゥー教時代 (B.C.10c～12c 末)

アーリア人の初期入植地の一つとして、ヴェーダやバラモン教といった後世のインド社会の基盤となる思想・文化の発達にともない、都市が発展する。B.C.6～5c には十六大国の一つカーシー Kashi 王国の首都として栄えている。4c以降はシヴァ崇拝が興隆し、シヴァ神の聖地としてのヴァーラーナシーの重要性が高まっていく。都市の基本的構造はこの時代に形成されている。

(2) イスラーム支配時代 (12c 末～18c 後期)

イスラーム勢力の度々の侵入により、多くのヒンドゥー教寺院が破壊される。イスラーム支配のもとムスリムが大量に移住し都市域が大幅に拡大する。地域コミュニティの再編、重要寺院の移設など、都市の構成上大きな変化が起こった時代である。

(3) イギリス植民地時代～現代 (18c 後期～)

18cはヒンドゥーの復興期であり、インド各地の有力者によって数多くの宗教施設が建設・再建され、現在ある「聖地・ヴァーラーナシー」の姿が形作られた時代。1794年、イギリス東インド会社の支配下に入る。19cには、イギリス直接支配の下に新市街地の開拓や広幅道路の建設など、都市に多くの変化がもたらされている。

ヴァーラーナシーの起源は現在の市街北部、ラージガート Raj-ghat 台地一帯である^{*11}。ここから都市はガンジス川の自然堤防上を、雨季の増水避ける形で川に沿って南方へと展開する。やがて水流により相隔てられた三つの小高い丘に、古代の居住地の核が形成される。以後ここを起点に、より内陸の水はけの良い土地を選びつつ都市は拡大していく。三つの居住地の中心にはそれぞれ寺院が建設され、後述する巡礼路＝聖域の中心として機能することになる。川の後背地に散在した池や湖沼、森林は行者の隠遁所として好まれ、ヴァーラーナシーが宗教都市として発展する一因となった（図2）。

古代ヴァーラーナシーの幹線道路は、三日月型に曲がるガンジス川に並行して上記の三つのエリアを結び付ける形で成立した。この幹線沿いに居住地が発展し、同時に河岸へと通じる路地がそれに直行して形成され、その端部にガート ghat^{*12} が作られた。したがって古代ヴァーラーナシーの街路パターンは、川にそって多少歪んでいるものの基本的に直交グリッドに基づいており、その痕跡は現在も都市のいくつかの部分で確認できる^{*13}。都市の基本的な構造は、主に地理的要因によって決定されたとみてよいだろう。

3. 巡礼路の形成

3-1. 巡礼路の理念的構造

現地調査に基づく具体的な論述の前提として、まずヴァーラーナシーの巡礼路の理念的な構造、およびその成立と変容の特質について整理しておきたい。ヴァーラーナシーは全インド的なスケールにおける巡礼地、すなわち巡礼の対象としての都市^{*14} であると同時に、都市そのものの内部に複数の巡礼路を有している。都市には数千の寺院・祠があるといわれるが、これらはマーハートミヤの定める巡礼路によって複雑に関連づけられている^{*15}。なかでも最重要視されているのが、ヴィシュヴァナート寺院を中心とした同心円をなす五

図2 都市の発生と初期の展開

地形と初期の居住地展開、巡礼路＝聖域の関係を示す (Singh, R.L.:1955 所収の図より作成)。

つの巡礼路である (図3)。

これらの特質は以下のように要約できる。1) 結界性：円環を描く巡礼路は線的な経路のみならず象徴的な境界を意味しており、その内側の領域は外部と峻別された聖域とみなされる。特に最外縁のチャウラシー・クロシー Chaurasi-kroshi 巡礼路^{*16}の外は、人の住むべきでない不浄の地と見なされている。2) 階層性：ある領域で犯した罪は、より内側の巡礼路を巡ることで浄められるといったように、同心円をなす五つの巡礼路＝聖域は、中心のヴィシュヴァナート寺院を頂点とした聖性のヒエラルキーを有する^{*17}。3) 神々の曼陀羅：巡礼地となる寺院・祠に祀られる神々は、ヒンドゥー教における方位、数のシンボリズムに即して配置されており、全体としてヒンドゥーの神々パネオンを形成している^{*18}。

R.P.B. シンによれば、つまりこれらの巡礼路＝聖域は、総体として古代インドの宇宙観すなわちメル山を中心とする同心円構造の世界を都市レベルで具現化したものである。それゆえ巡礼者 (ミクロコスモス) は都市内の巡礼路をめぐること、同時に世界全体 (マクロコスモス) をもめぐる巡礼をも成し遂げることになり、都市は両者を媒介するメソコスモスとして機能するというメカニズムがここに実現する。以上のような精緻に構造化された巡礼路の体系は、ヴァーラーナシーがインド第一の聖地であることの有力な根拠とみなされている。

3-2. 巡礼路の成立と変容

各巡礼路の詳細な成立年代は明らかではないが、巡礼路に言及す

るマーハートミヤの推定成立年代が参考となる (表1)。時代の幅はあるが概ね12c頃を境として、それ以前に成立した巡礼路 (①、③) と、それ以後のもの (②、⑤) とに大別することができる。より精密な記述がなされているのは、イスラム勢力の侵入以降となる後者であることは指摘しておきたい。

ヒンドゥー教における巡礼路の最も古い例としては、マハーバーラタ Mahabharata^{*19} に記されたインド亜大陸全土をめぐる大巡礼路があるが、これは5cにおけるヒンドゥー文化圏が拡大する様相を反映したものとされる^{*20}。すなわち交易路でもあった巡礼路は、当時まだヒンドゥー化されていない土地を避けつつインド各地の重要都市を結ぶかたちで形成されたという指摘であるが、これと類似した事例がヴァーラーナシーにおいても見いだされる。ガンジス川沿いには、南北に並んだ三つの巡礼路＝聖域が存在するが、これらは前述した古代における三つの居住地の核に対応したものである (図2)。巡礼路は主に4～6c頃から成熟した市街地の境界を画するように成立し、後に居住地の拡大に応じて巡礼路も新たな市街域を組み込んで拡大していったと考えられている^{*21}。

反対に、巡礼路＝聖域が現実的諸条件に対応して縮小する事例も見られる。カーシー Kashi^{*22} の聖域を画するのは、本来チャウラシー・クロシー巡礼路 (以下、84K 巡礼路と略記) であったが、16c頃までには内側のパンチャ・クロシー巡礼路^{*23} (以下、5K 巡礼路と略記) がカーシーの境界であると一般に考えられるようになった^{*24}。また、5K 巡礼路と84K 巡礼路とが接する西側部分には「カーシーの西門」と呼ばれるデーヘリー・ヴィナーヤカ Dehli-Vinayaka 寺院があり、二つの巡礼路はその前後においてほぼ一致している。前述した巡礼路の推定成立年代区分もあわせれば、5K 巡礼路は84K 巡礼路 (=理念形) の縮小版として成立したと考えてよい。具体的には東限がガンジス川により定められ、北限と南限がそれぞれヴァルナ川とアッシー川付近まで後退している。この領域は5K 巡礼路が成立した時代における、都市の現実的な勢力圏を反映したものと考えられる^{*25}。

これらの事例は、巡礼路＝聖域とは必ずしも理念や聖跡に基づいて成立するものではなく、むしろ地形や文化的・政治的状況、巡礼路をつくる主体の勢力圏など、現実的な諸条件に適応して柔軟に設定・修正されるものであることを示している。そこには自らの勢力圏を理念的に構造化することにより、その存在を既成事実化し、さらに宗教的に権威付けするという一種の政治的意図が見て取れる^{*26}。

巡礼路	主なマーハートミヤ (推定成立年代)
① チャウラシー・クロシー	Linga Purana (7-11c) Padma Purana (10c 頃)
② パンチャ・クロシー	Kashi Khanda (~13c 頃) Kashi Rahasya (比較的後代)
③ ナガラ・プラダクシナ	Matsya Purana (7c 頃) Padma Purana (10c 頃)
④ アヴィムクタ	Matsya Purana (7c 頃) Kashi Khanda (~13c 頃)
⑤ アンタルグリハ	Kashi Khanda (~13c 頃)

表1
巡礼路について言及する主なマーハートミヤ
文献の推定成立年代は Harza (1940) にもとづく。

図3 同心円をなす5つの巡礼路

Gutschow:1994 所収の図をもとに作成。①チャウラシー・クロシー巡礼路 ②パンチャ・クロシー巡礼路 ③ナガラ・プラダクシナ巡礼路 ④アヴィムクタ巡礼路 ⑤アンタルグリハ巡礼路 巡礼にかかわる主要な寺院・祠

つまり巡礼路は単純に宗教的儀式上の装置であるほかに、その宗教の依拠する勢力（文明・都市など）の支配圏の反映あるいは意図的な宣言でもある。ヴァーラーナシーにおける巡礼路＝聖域の複雑な体系化は、その意図をより強化するための手段と解釈できる。都市と理念型との一般の関係からすれば、都市の成熟に先立って理念型として巡礼路＝聖域が設定され、それに沿って都市が発展するというケースも想定しうるが、ヴァーラーナシーに関しては上に述べた経緯や現在の街路形態と巡礼路の関係からみて、巡礼路＝聖域は明らかに都市発展を跡付けるかたちで設定されたものである。したがってヴァーラーナシーでは、巡礼路が都市構造を形成するアプリオリな要因として作用していたとはいいがたい。

4. アンタルグリハにおける巡礼地（寺院・祠）

巡礼路および寺院・祠と物理的な都市空間との関係性について、現地調査によってえられた寺院・祠の立地、分布、変容の実態に基づき、よりミクロなスケールで考察を行う。調査対象としたのは、同心円をなす巡礼路のうち最奥の、アンタルグリハ巡礼路とその内側の聖域である^{*27}。都市の三つの核の一つとして最も古くから発展し、かつイスラームによる破壊を比較的免れたため歴史的連続性を保持していること、また現在も都心として重要な施設が集中する領域であることが、その理由である。

現在アンタルグリハ巡礼路は、パンチャ・クローシー巡礼路とならんで巡礼者に最も人気の高い巡礼路である^{*28}。巡礼者の多くは都市外から訪れる人々であり、一般の住民で巡礼を行う者は今日では少ないが、マーハートミヤには巡礼の頻度に関する規定があり、もともとヴァーラーナシーの住民を対象として設定された巡礼路である^{*29}。都市に多数居住する修行者や僧は、今もごく頻繁にこの巡礼を行なっている。

4-1. 巡礼地（寺院・祠）の特性

アンタルグリハ巡礼路はヴィシュヴァナート寺院を中心として、七週の螺旋を描きながら 72（72 番目は 5 つの祠からなり、最初と最後に訪れるヴィシュヴァナート寺院を含めると、正確には 77）の寺院・祠などを巡るものである（図 5）。

ヒンドゥー教において崇拝の対象とされるものは多様である。最もポピュラーな崇拝対象は、シヴァ神やヴィシュヌ神などの強大な神格を祀る寺院であるが、川や池、井戸といった水に関わる場所、大樹などもまた崇拝対象である。後者はそれ自体が熱心に信仰されると同時に、多くの場合その周囲に様々な神格を祀る寺院・祠を伴っている。アンタルグリハ巡礼路の巡礼地のうち、聞き取り等によって同定できたのは 71 であった^{*30}。巡礼対象となる寺院・祠の特質は以下の三つの観点からまとめることができる。

(1) 場所性

巡礼地のなかには池（#1:図 5 の数字に対応。以下同）、井戸（#63）そのものが崇拝対象であり建築物をともしないものがある。川辺にあったリングが年々の氾濫により完全に川に水没し、今やまったく存在しないものもある（#8）。しかしそれにもかかわらず依然このリングは巡礼地である。また 10 の巡礼地は現在の地表面より下に位置している。あるものは小広場下の立ち入りできない地下室にあり、地上にはのぞき穴が空けられているのみで、建築物はまったくない（#25）^{*31}。

図 4 増改築により取り込まれた寺院

これらの状況は、重要なのはリング（あるいは他の神体）の象徴する「場所」であり、ゆえにリングはほとんど移動せず、そして時に建築物すら必要としないという事実を示している。場所の元来の性質は不変であると考えられるため、リング＝聖地は容易に移動されることはない。たとえ何らか環境的な変化（異教徒による破壊、自然現象など）が生じた結果そのリングが失われたとしても、その「場所」の記憶は残り信仰を集め続けるのである^{*32}。

(2) 建築的非独立性

ヴァーラーナシーの寺院の特徴として、建築的に独立した形状をもつものが比較的少ないという点がある。巡礼地のうち寺院は 52 あるが、固有の入口をもち周囲の建築から独立して建っているものは、21 に過ぎない。建築的に非独立の寺院の中では、周壁に店舗が増築されているものが 6、当初は独立した寺院であったものが周囲の建築物に取り込まれたものが 7 ある。取り込まれ方には全体が包み込まれてしまう場合と一部が他の建築にめり込む場合とがあるが、いずれにせよ元の寺院建築の形態をとどめているのが特徴である（図 4）。また本尊を覆う固有の建築物をもたず他の建築内の一部が寺院となっているものが 18 ある。その多くは住宅内の一室が寺院となっているものであり、もともとその地にあった祠やリングを新しい建築の一部に組み込んだ結果である。

明らかなことは、一度建った寺院は原則として破壊されないということである。住民は既存寺院をいわば地形と同様の前提条件とみなした上で、各々の増改築の要求を実現しているのである。寺院としての機能を失い完全にコンバートされたり^{*33}、住居内の一祭壇化する場合もあるが、基本的に寺院機能は維持され参拝者にも開放されている。

(3) 住宅との関係

24 の巡礼地が何らかのかたちで住宅の内部に存在している。住宅建築に包み込まれたもの、中庭に寺院・祠が建てられたもの、一室が寺院として扱われているものなどである。巡礼地として信者一般に共有されるべき寺院が、個人住宅の内部にある理由としては二つが考えられる。第一には寺院・祠を異教徒から守るという防衛上の理由である。12c 以降、ムスリムの支配者はヒンドゥー教の宗教的中心を重点的に破壊する政策をとっており、巡礼地となるような重要な寺院はその格好の標的とされた。それゆえ破壊を免れた寺院あるいは新たに再建された寺院は、外部から容易に見えないよう

に住宅の内部に取り込まれたのである^{*34}。第二には、寺院・祠のほとんどが個人的所有物であるという事情がある。ヴァーラーナシーの寺院・祠の半数以上はマハント mahant と呼ばれる個人の所有であり、巡礼地となっているものも例外ではない^{*35}。したがって寺院・祠の立地は所有者の意図に大きく依存しており、住宅の中庭に建設されたり一室が寺院にあてがわれるという事態はこの点から理解される。しかしこれらが個人の所有物であると同時に都市全体の共有物と認識され、巡礼者が訪れたときは快く迎えられられるという事実は注記したい。

本項ではアンタルグリハ巡礼路の巡礼地となっている寺院・祠のみを分析の対象としたが、同様の傾向がヴァーラーナシーの寺院・祠一般についても当てはまると考えてよい。以上のような事情は、都市全体が寺院・祠との複合体であるようなヴァーラーナシー特有の都市景観を形成している一因である。

4-2. 寺院・祠の分布と巡礼路

1929年の地図にはヒンドゥーの寺院・祠をはじめ、モスクや井戸などがプロットされている。現地調査により、宗教施設についてはほぼ全てが同じ位置にあることを確認した。加えて地図にはプロットされていない小規模な祠が住居壁面、路傍、大樹の下などに多数存在する。その数はアンタルグリハ内で寺院・祠が約700、モスク29、キリスト教会1を数える。

まずモスクを含む宗教施設の分布は、ヒンドゥー教徒とムスリムの住み分け状況を明快に示している。またムスリム居住地以外では、寺院・祠は一見まんべんなく分布しているようであるが、地区・街路により分布密度にかなりの差があることがわかる(図5)。宗教施設の分布密度が比較的高い地区・街路はその性質から次のように分類できる。

A：全インド的重要性をもつ寺院・祠クラスター

B：Aを結ぶ街路沿い

C：ローカルな寺院・祠クラスター

Aに分類される地区は三つあり、その核となるのはヴィシュヴァナート寺院やマニカルニカ・ガート Manikarnika-Ghat (火葬ガート)、ダサシュワメダ・ガート Dasashwamedha-Ghat といった、全インド的な宗教的重要性を有する、聖地ヴァーラーナシーの根拠ともいべき施設群である。それらの周囲には極めて高い密度で寺院・祠が集積し大規模なクラスターを形成している。卓越して重要な寺院の周囲に大小の宗教施設が集まる傾向は明らかである。続いて分布密度の高いBは、Aのクラスター三つを結ぶ二つの街路沿いである。これらの街路自体はもともと神話や伝説に彩られた「聖なる場所」ではなく、傑出して重要な寺院も少ない。しかし最も重要な巡礼地を結ぶ最短の経路であり、ヴァーラーナシーを訪れる巡礼者のほぼ全員が通行する街路である。特にヴィシュヴァナート寺院とマニカルニカ・ガートを繋ぐ街路は、都市外部から運ばれてきた死体と葬送の行列の主要な経路でもある。つまりBの示す高密度の分布からは、巡礼という人の通過交通がこれらの街路に宗教的重要性を付加し、新たな寺院・祠の建設に際してこの街路沿いを敷地として選択させる要因となった可能性が指摘できる。それに対してCに分類されるものは、井戸や大樹、小規模なガートなど、その場所にある物理的要素に根ざしたローカルな聖地を中心に形成された寺院・祠群である^{*36}。それらの寺院・祠はコミュニティの守護神であり、近隣コミュニティの核として機能している。

以上の宗教施設分布とアンタルグリハ巡礼路を重ね合わせることにより、巡礼路が全インド的レベルで重要な聖地とローカルな聖地とを結合し構造化する役割を果たしていることが推察される。前述したように巡礼路＝聖域とは、居住地の範囲を反映して設定されたものである。アンタルグリハ巡礼路に関するマーハートミヤ、カーシー・カンダ Kashi Khanda^{*37}は13c頃の成立とされ、この巡礼路＝聖域は当時の主要な市街域を示唆するものと考えてよい。その

図5 アンタルグリハの巡礼路＝聖域
巡礼路の経路および巡礼順序(数字)はSingh, R.P.B.:1993に準ずる。

際、当時すでに全インド的な重要性を獲得していた聖地・寺院(A)が聖性の根拠として巡礼路の核とされ³⁸⁾、またその他の巡礼地として、居住地内各部に散在するローカルな聖地＝地域コミュニティの中心(C)が選択されたと考えるのは自然である。したがってそこを巡礼するという行為は、3-1で述べたように壮大なコスモロジーを体現する宗教実践であると同時に、都市住民の生活圏である各コミュニティを実際に訪れるという都市空間体験を伴っている。つまり巡礼路とは、成長・拡大する居住域の各部分にある段階で理念的に組織だてるとともに、住民が身をもってそれを確認する手段であり、その意味においても、都市の構造化およびその維持・再認識を保証するシステムとみることができるだろう。

5. 街区形態の変容と巡礼路

ダルマクープ Dharmakoop と呼ばれる一街区を対象として、1822年³⁹⁾、1929年の地図および現況の比較を通じて街路形態の変容過程のトレースを試み、その中で巡礼路が及ぼした作用について一仮説を提示したい。対象街区は内部に井戸のある小広場を有し、東南隅が欠けた矩形形状である(図6)。アンタルグリハの領域中でも歴史的に早くから都市化された地区であること、古代の街路パターンを残していること、巡礼路に組み込まれている(巡礼地が街区内部に存在する)ことが同街区を選定した理由である。

まず1929年の街区構成は基本的に現在とほぼ変わらない。主な相違点は街区東部の袋小路の存在(①:図6中の数字に対応)、井戸周囲の小広場が現在よりもやや広がったという点である(②)。1929年から2000年にかけて、街路を蚕食する住宅の増改築が頻繁に行われ、もともと街路上にあった複数の寺院が住宅内に取り込ま

れていることが確認された。1822年と1929年の地図との比較からは、街区中心の小広場から西側の街路へと通り抜ける路地が存在したこと(③)、小広場がさらに広がったことがわかる(④)。小広場から西へ抜ける路地の痕跡は、現在も袋小路として残っている(⑤)。

前述したように古代ヴァーラーナシーの街路パターンは基本的に格子状であった。特にこのエリアでは現状が示すように、方位軸に沿った正確なグリッドが適用されている。井戸は街路の形成された初期から存在していたと考えられる⁴⁰⁾。居住密度が低い段階で街区中央の空き地に共有井戸を設けることは、しばしば見られる事例である。1822年から現況への変化からみて、街区形成の初期段階では井戸周囲の広場は今よりもずっと広く、現在袋小路となっている路地は主要街路と広場を繋いでいたと考えてよい。その後次第に街区の密度が高くなるにつれて、広場へ通じる路地は私有化され住居が建設された結果袋小路となった。東南部の角は隣接街区の寺院が増築されてふさがったため、当初主要街路と広場を結んでいた2つの路地がつながり、現在の鍵型の街路が形成されたと考えられる(⑥)。周囲の街路から広場へのアプローチは、最終的に東南部の一カ所のみとなっている。

以上の推測が正しいとすると、なぜ数本あった広場へ続く路地のうち東南部のものだけが残ったのかが疑問となる。その要因としてアンタルグリハ巡礼路の存在を考慮したい。この付近の巡礼地は図7に示すとおりであるが、これらを定められた順序通りにまわる最短のルートは、広場へ抜ける道が他にあったとしても、現在残っている鍵型の街路と重なっている。つまりこの街路は、巡礼路であるがゆえに維持されてきたのではないか。たとえ付近住民に住居の増築・新築の必要が生じた場合も、巡礼者の頻繁に通過する巡礼路を

図6 ダルマクープ街区の変遷

図7 巡礼路と街路の関係(模式図)

塞ぐことは意識的に避けられてきた結果と考えられるのである(図7)。したがって街区の骨格や初期段階での街区形成は基本的に地形的条件や生活上の機能的要求に基づくものであるが、その後の変遷・増築により袋小路とする街路の取捨選択については巡礼路が一定の要因として作用していた、というのが仮説である。

6. まとめ

本稿で明らかにした諸点をまとめると以下のようになる。

- ① 古代における居住地の立地および発展過程、街路パターンの形成は主として地理的要因に基づく。
- ② ヴァーラーナシーの巡礼路＝聖域は、宗教的理念だけでなく地理的・社会的条件に基づき、既存の都市や居住地の境界を画するため設定・修正されたものである。
- ③ 信仰において重要なのはまず「場所」である。また一度建設された寺院・祠は、地形と同様に新規の建設に際しての前提条件と見なされる。寺院・祠の多くが防衛上の理由や個人所有であることから、住宅の内部に設置されたり増改築によって取り込まれたりする事例が多い。これらの事情により、都市全体が寺院・祠との複合体であるようなヴァーラーナシー特有の景観が生み出されている。
- ④ 宗教的に重要な施設が存在や巡礼者の通行は、新たな寺院・祠の建設を促す傾向がある。巡礼路は都市各部のローカルな聖地＝近隣コミュニティの中心を組織化する側面を有する。
- ⑤ 1822年、1929年および現況の街区構成の比較に基づき、「巡礼路が街区構成の変容過程において一定の要因(取捨選択の判断基準)として作用していた」という仮説を提示した。

本稿では、従来「聖地」として宗教的側面からのみ語られることの多い都市・ヴァーラーナシーを論じるにあたり、宗教的要素をあくまで都市形成の一要因と位置づけた上で、それが都市の構成と変容過程に対して、どのように影響したのかを視点とする考察を行った。その結果、都市の基本構造はまず地形的条件により決定されたものであり、巡礼路＝聖域とその理念的体系は成熟した都市を背景として、後から設定されたものであることを指摘した。その意味では、これらの宗教的要素は都市構造を規定するアプリオリな要因とはいいがたい。しかしそのようにして設定された巡礼路は、寺院・祠、住宅など個々の建築や街路形態の変容など、よりミクロなスケールにおいては一定の決定要因として作用していることを明らかにした。以上の考察からは、都市の物理的存在に基づきこれを構造化する宗教的理念が設定され、それに基づき都市が変容し、さらに宗教的理念が再定義されるという、一種の循環・螺旋状の都市形成プロセスが予見される。

しかしヴァーラーナシーは宗教都市であると同時に生きた都市であり、民族・カースト毎の住み分けや街路を軸としたコミュニティ組織など重層的な構造を有している。これらが都市空間の構成および宗教的要素とどのような関係をもっているかについては、今後の課題としたい。また本稿で述べた街路形態と巡礼路の関係は一街区での検証に基づく仮説であり、個々の建築の変化を含めたより詳細な街区構成の変容については別稿としたい。

註

※1 ヴァーラーナシーは時代毎に異なる名前によって表わされてきた。サンスクリット文献を基にすると“Varanasi”という表記となり、現在の公式の都市名もこの名であるため、本稿ではこれを用いる。“バナーラス Banaras”という呼称も一般的である(英語名“ベナレス Benares”はこれが転訛したもの)。“Varanasi”および“Banaras”は地理的な要因に基づく呼称であり、その由来は都市の南北に流れるヴァルナ Varuna 川とアッシー Assi 川であるとされる。

※2 本稿で使用する「寺院・祠」はすべてヒンドゥー教の寺院および祠をさす。ヴァーラーナシーにおける「寺院」と「祠」の峻別は困難であるが、本稿ではその規模に応じて人が入り祭儀を行うことの可能な内部空間(内陣)を有するものを「寺院」、人の入れない小規模なものを「祠」と呼ぶ。

※3 代表的なものとして、古代インドの建築書「マナサラ Manasara」に記されたプラスタラ Prastara に基づくとされるラージャスタン州の州都ジャイプル Jaipur、タミルナドゥ州のマドゥライ Madurai、シュリーランガム Srirangam、カンボジアのアンコール Angkor などがあげられる。

※4 Singh, R.P.B.(1993), pp.37

※5 「威光書」の意。ヒンドゥー教にまつわるサンスクリット文献のうち、特に聖地に関連した伝説や儀式作法、功德などを説く一連の文献群の呼称。ヴァーラーナシー(カーシー)にまつわるものはカーシー・マーハートミヤ Kashi Mahatmya と呼ばれる。

※6 ヴィシュヴァナート寺院はヴィシュヴェシュヴァラ Vishveshvara 寺院とも呼ばれる。ヴィシュヴァナートはシヴァ神の一形態であり、ヴァーラーナシーの主神。どちらの呼称も「世界の主」を意味する。

※7 ヴァーラーナシー・ナガル・ニーガム Varanasi Nagar Nigam による複写版。弘中誠二氏所有のものから複製をとらせていただいた。

※8 イスラーム圏で広く見られる、居住区域あるいは近隣コミュニティの単位。インドではムガル帝国による支配以降、定着したと考えられる。モハッラは地縁的な繋がりとともに、カーストを基盤とした強い人的結束力をもつ。

※9 現地調査は1999年8-10月(柳沢究、布野修司、モハン・バント、吉村理)および2000年10-11月(柳沢、橋本慎吾)の二度にかけて、アンタルグリハ領域内での施設・店舗分布調査、ヒアリングによるコミュニティの境界調査、街区・住居の実測、住居に関するヒアリング調査、ガートの使われ方調査などを実施した。

※10 都市史に関しては、主に以下の文献を参考にまとめた。Altekar(1947), Eck(1983), Havell(1905), Sherring(1868), Singh, R.L.(1955, 76, 73), Singh, S.B.(1996), Sukul(1977)。

※11 Singh, B.P.(1985)。台地は海拔約83mであり周囲の平野とは15m、川面とは約18mの高低差がある(Singh, R.L.:1955, pp.18)。ガンジス川は雨季に7m前後増水する。

※12 河岸に建設された階段(または斜面)状の施設の総称。沐浴や火葬といった宗教儀式的ほか、炊事・洗濯など生活全般に利用される。ヴァーラーナシーにはガンジス川沿いに約80のガートが存在する。

※13 ヴィシュヴァナート寺院東部や市街南部のAwadh-Sivala地区などに、正確な直交グリッド状の街路が残っている。Singh, R.L.(1973), pp.23-27。

※14 現在インドには一説に約1820カ所の聖地が存在するといわれる。これらのうちいくつかの重要な聖地が組み合わされて、各種の聖地巡礼が設定されている。バナーラスはそのうち七聖都(サプタ・プリー Sapta puri)、三祖霊供養所(トリスタリー Tristali)に名を連ねる。

※15 Singh, R.P.B.(1987)によれば巡礼路は42を数える。それらは性質により、毎日行すべきもの、聖域を画するもの、方位に関係するもの、水辺に関するもの、特定の神を巡るもの等に分類することができる。

※16 84クローシャ kroscha の巡礼路の意。kroscha は距離の単位で1kroscha ≒ 3.5km。半径5kroscha の正円形をした理念上の巡礼路。Padma Purana に詳細な記述があるが、対応する実際の道や寺院・祠(の跡)は確認されていない。129万6千年前カーシーは円盤状の形をしていたという神話の思想を象徴的に表現したものと考えられる(R.P.B.Singh:1993, pp.40)。

※17 マーハートミヤの一つ、カーシー・ラハスヤ Kashi Rahasya の記述に基づく。最内縁の領域で犯した罪は最外縁の巡礼により浄化されるという循環構造をも有する(宮本:1995, pp.120)。

※18 Singh, R.P.B.(1993), pp.189-199。

※19 5c頃の成立とされる古代インドの大叙事詩。バラタ族に属するクル族の百人の兄弟とバーンドゥ族の五人の兄弟との間に起った戦争物語。ヒンドゥー教における宗教・哲学・倫理・政治・法律その他あらゆる方面の根本聖典。

- ※ 20 Bhardwaj (1973), pp.32-33.
- ※ 21 Singh, R.L. (1977), pp.18.
- ※ 22 ヴァーラーナシーの別称の一つで「光輝く地」の意。都市を含むより広い領域を指し、特にシヴァ神の聖地としての性質を強調する際に使用される。
- ※ 23 5クローシャ krosshaの巡礼路の意。名称は一日に5krosshaずつ進みながら、五日間かけて108の寺院・祠を巡るという巡礼作法に由来する。
- ※ 24 Singh, R.P.B. (1993), pp.43.
- ※ 25 Sukul (1977, ch.3) は、ガンジス川東岸部が除かれたのはB.C.6～4c頃、敵対するマガダ国の支配下にあったため、北部の縮小はコーサラ国に対する防衛上の必要やサルナート Sarnathにおける仏教徒の増大等があったためと指摘している。5K巡礼路の推定成立年代は後代の13c頃であるが、都市の実質的な勢力範囲は大きく異ならなかったと思われる。
- ※ 26 宮本 (1995, pp.115) が指摘しているように、巡礼路に言及するマーハートミヤの多くが、12～16cというイスラーム支配時代に編纂されていることは注目に値する。現実における危機と観念における肥大は表裏一体であり、巡礼路＝聖域の制定はイスラーム支配下におけるヒンドゥー教徒の観念的抵抗運動の一環と見なしようだろう。各種マーハートミヤの推定成立年代についてはHarza (1940) およびEck (1980) に詳しい。
- ※ 27 「アンタルグリハ」は「至聖所」「内陣」を意味する一般的な語。例えば、図2に示す3つの巡礼路に囲まれた聖域は、それぞれが中心寺院の「アンタルグリハ」である。しかし、ヴァーラーナシーにおいて一般に「アンタルグリハ」といえば、中央のヴィシュワナート寺院を囲む最奥の巡礼路とその内側の聖域を指し、本稿で論じる「アンタルグリハ」も、この巡礼路と聖域である。
- ※ 28 具体的な数値を示す資料は無いものの、ヒアリング調査でも多数の巡礼者がこの2つの巡礼を行なっていることが確認された。チャウラーシー・クローシー巡礼路は理念上の存在であるため、実際に巡礼を行う者は少ない。他の巡礼路は修行者や僧をのぞき、現在、巡礼を行う者は稀である。
- ※ 29 アンタルグリハ巡礼は、「原則として毎日行わなければならないが、それが不可能ならば月に一度新月の晩に、少なくとも年に一度は必ず行わなければならない」とされている (Singh, R.P.B.: 1993, pp.50)。アンタルグリハ巡礼路に限らず他の巡礼路も、マーハートミヤにより巡礼の頻度や時期が定められている。
- ※ 30 本稿で扱うアンタルグリハ巡礼路および巡礼地は、Singh, R.P.B. (1993) の記述に基づく。
- ※ 31 地下寺院の数はヴァーラーナシー全体の寺院のうち2.1%を占める (Vidyarti:1979, pp.31)。神体が設置された地盤の深さは、その寺院が設立された当時の地表面を示すものと一般に理解されている。
- ※ 32 失われたリンガ (あるいは神像) の代わりにレプリカが設置されることも多いが、事情は変わらない (Gutschow:1994, pp.203)。このような「場所性の重視」はヒンディー語でスターナプラダーム sthanapradham と呼ばれ、南アジアに広くみられる現象である。
- ※ 33 寺院建築の住居・商店への転用は、しかし宗教的にはタブーとされる。Vidyarti (1979), pp.44.
- ※ 34 Sukul (1977), ch.6.
- ※ 35 Vidyarti (1979), pp.34.
- ※ 36 ヴァーラーナシーのモスクは12c以降に、ヒンドゥー寺院からコンバートされた事例が多く、コミュニティセンターとしての機能は継続していると考えられるため、図5では近隣コミュニティの中心となっているモスクもCに分類している。
- ※ 37 スカンダ・プラーナ Skanda Puranaの一部であり、カーシー・マーハートミヤの中で最も知られたものの一つ。パンチャ・クローシーやアンタルグリハ巡礼路など数多くの巡礼路についての詳細な記述を含む。成立年代には諸説あるが、現在伝わる形に編纂されたのは12c頃以降という説が有力である (Eck:1980, pp.81-83)。
- ※ 38 ヴィシュワナート寺院は聖域の中心として巡礼の始点・終点であり、マニカルニカ・ガートは第1番目の巡礼地である。ダサシュワメーダ・ガートは聖域の南限を示す。
- ※ 39 “The City of Banarus : Surveyed by James Prinsep, 1822”に基づく。主要街路と寺院などの施設、さらにアンタルグリハ巡礼路が記されている。分析にあたっては近藤隆二郎氏所有の写真複製をお借りした。縮刷版がPrinsep (1833) に所収。
- ※ 40 街区の名称である「ダルマクープ」は中央の井戸の名に由来する (クープkoopは「井戸」の意)。伝説によればこの井戸は、仏教徒の増大に対抗してカーシーを守ったDivodasa王が掘ったものである (Eck:1983, pp.155)。ダルマ Dharma という名称から仏教徒によるものという説もあるが (Sher-

ring:1868, pp.85)、どちらも仏教勢力の強かった時代 (1～3c頃か) に作られたという点で一致しており、井戸の周辺にはかなり早期の段階から居住地が形成されていたと推測される。

主要参考文献

- [1] Altekar, A.S. : Benares and Sarnath - Past and Present, Banaras Hindu University Press, 1947
- [2] Bhardwaj, S.M. : Hindu Places of Pilgrimage in India - A Study in Cultural Geography, Univ.of California Press, 1973
- [3] Eck, Diana L. : Banaras - City of Light, Princeton Univ. Press, 1983
- [4] Eck, Diana L. : A Survey of Sanskrit Sources for the Study of Varanasi, Purana, vol.22, No.1, pp.81-101, Jan. 1980
- [5] Gutschow, Niels : Varanasi/Benares - the Centre of Hinduism?, Archiv fur Wissenschaftliche Geographie 48, pp.194-209, 1994
- [6] Havell, E.B. : Benares the Sacred City - Sketches of Hindu Life and Religion, Vishwavidyalaya Prakashan, 1905
- [7] Hazra, R.C. : Studies in the Puranic Records on Hindu Rites and Customs, Univ. of Dacca, Bulletin No.20, pp.159-160, 1940
- [8] Narain, A.K. : Excavations at Rajghat Part I-IV, Dept., A.I.H.C. & Arch. B.H.U., 1976-78
- [9] Prinsep, James : Benares Illustrated - In a Series of Drawings, Vishwavidyalaya Prakashan, 1833
- [10] Sherring, M.A. : Benares - the Sacred City of the Hindus in Ancient and Modern Times, Low Price Publications, 1868
- [11] Singh, Birendra Pratap : Life in Ancient Varanasi - An Account Based on Archaeological Evidence, Sundep Prakashan, 1985
- [12] Singh, R.L. : Banaras - A Study in Urban Geography, Nand Kishore&Bros. Varanasi, 1955
- [13] Singh, R.L. : Origin, Growth and Morphological Structure of Varanasi, Reprinted from Indo-Soviet Collaborative Volume : Urbanization in Developing Countries, Osmania Univ., pp.475-500, 1976
- [14] Singh, R.L. : Social Factors in the Morphogenesis of Varanasi - A Suggestion in Technique for Form Evaluation, the National Geographical Society of India, pp.3-27, 1973
- [15] Singh, Rana P.B. : The Pilgrimage Mandala of Varanasi / Kashi - A Study in Sacred Geography, National Geographical Journal of India, vol.33-4, pp.493-524, 1987
- [16] Singh, Rana P.B. : Banaras (Varanasi) - Cosmic Order, Sacred City, Hindu Traditions, Tara Book Agency, 1993
- [17] Singh, Rana P.B.(Ed.) : Sacred Geometry of India's Holy City Varanasi - Kashi as Cosmogram, National Geographical Journal of India, vol.40, pp.189-216, 1994
- [18] Singh, Shashi B. : Setting Process and Spatial Pattern of Linguo-Cultural Groups in Varanasi City, National Geographical Journal of India, vol.42, pp.116-132, 1996
- [19] Sukul, Kubernath : Varanasi Valbhav, Bihar Rashtrabhasha Parishad, 1977 [in Hindi]
- [20] Vidyarthi, L.P. : the Sacred Complex of Kashi - A Microcosm of Indian Civilization, Concept Publishing Company, 1979
- [21] 近藤隆二郎 : 沐浴都市のラフスケッチ - 水文化の再構成をめざして、都市問題研究, No.548, 1996
- [22] 宮本久義 : 天界に連なる巡礼路, インド道の文化誌 (小西正捷, 宮本久義 (編)), pp.106-122, 春秋社, 1995
- [23] 山折哲雄 : 聖地と仏教の機能, 日本仏教学会年報, No.47, pp.331-343, 1981

(2003年12月10日原稿受理, 2004年5月18日採用決定)